

人紙の表

大学で培った友情のエール

「自分にはないものを

持っている」と山形さん

「悩んだとき助けて

くれた」と加藤木さん

サッカー部(前) 主将

山形雄介さん

準硬式野球部(前) 主将

加藤木健さん



きつかけとなり、すごくありがたかったです」と山形さんは感謝の念を口にします。

他方、加藤木さんにとっても山形さんは、「悩みがあるときに相談するとの確なアドバイスをしてくれる」大切な友人だ。だから「助けてくれた分、山形を助けたかった」と第57回全日本大学サッカー選手権大会では一回戦から決勝戦まで応援に駆けつけた。

決勝戦で、山形さんと加藤木さんは国立競技場バックスタンドの最前列に並んで、メガホンを手に声をからした。

その甲斐あってサッカー部は16年ぶりの優勝を飾った。その瞬間を見届けた二人は、友情の絆を確認するかのようには、笑顔を見合せて、がっちり握手した。

山形さんと加藤木さんは、卒業後はそれぞれ別の道に行く。例えばその道は平行線でも、大学時代に根付かせた二人の友情の両輪は、永遠にレール上を走り続けるに違いない。

山形雄介さんと、加藤木健さんは、南平寮で知り合ってから、大変仲がよい。「1年のときはすれ違っても、暗いな、笑わない男(山形さん)がいるなと思った」と加藤木さん。それがいまでは、二人は切っても切れない親友だ。

山形さんは、加藤木さんについて「自分にはないものを持っている」という。「広い交友関係だったり、誰にでも話しかけられる積極性だったり、自分をさらけだせるところだったり。加藤木のことを悪く言う人に会ったことはありません」とべた褒めだ。

加藤木さんは、他のサッカー部員とも仲が良く、

サッカーの試合には必ずといっていいくらい応援

に行く。「負けた試合で敗因が分からず困っているときに、加藤木が適切なアドバイスくれたことがありました。最初に決めたルールが徹底できていないという簡単なアドバイスでしたが、僕たちサッカー部にとっては根本的なことを見直す

16年ぶりの大学日本一にチーム導く 見えない努力で見える結果出すの一念

法学部

山形雄介さん

中大サッカー部が16年ぶり8回目の大学日本一に輝いた1月11日、主将の山形雄介さんは聖地・

国立競技場のバックスタンドで優勝の瞬間を見守った。累積警告による出場停止で決勝戦のピツ

チに立てなかつたのだ。

スタンドに「ヤマガタ」コール 日本一は「4年生全員」の力

ピッチ上で表彰式を終え、優勝カップを手にしたイレブンが、歓声に揺れるバックスタンドに駆け寄ると、「ヤマガタ」コールが湧き起こった。チームの気持ちがひとつになって主将を讃えたのだ。

「自分がキャプテンだということを意識することもそれほどなかったし、4年生全員でサッカー部を引っ張ろうという考え方で動いていました。チームを「大学日本一」に導いた主将の力は決して小さくないはずだが、控えめに「4年生全員」



の力を強調した。

山形さんは、4年生まで公式試合出場経験がほとんどなかった。公式試合のメンバーに選ばれたのは3年次からだ。それもスタメンではなく途中交代での出場や、累積警告による出場停止選手のピンチヒッターとしての出場が目立った。初めて完全出場をしたのは3年次の最終戦だ。

3年次では、サッカー部の会計をつとめた。重要だが、裏方の仕事でもある。2年生のときから先輩に「次の会計は山形がやれ」と言われ続けていたという。

公式試合の出場経験が少なく、会計を担当していた山形さんをキャプテンに選んだのは佐藤健監督、そして4年生全員の判断だった。2007年12月、監督から「次期キャプテンは山形と考えている」という事実上の指名があった。しかし、「キャプテンは、みんなの納得を得てやるべき」と考えた山形さんは、4年生全員を集めて自分がキャプテンを引き受けるべきかどうかを話し合った。



このステップを踏んだ意義は大きいと振り返る。「4年生全員で話し合いをしました。監督の意思ももちろん汲んでいるのですが、何より、自分達で決めた」という事実が重要だと思っていたので決めたことに1%でも逃げ道をつくったら、結局何かあったときに言い訳にしてしまおうと思う」。

個人として部員の信頼得る 部員全員で応援する体制に

山形さんは、「キャプテンだから」という枕詞を好まない。「キャプテンだからどうのこうのという前に、一選手として個人としての評価を出していかなければならないと思っている」からだ。

大きな目標を持ち続けた。それは、常に優勝争いに絡むチームにすることで、「強い中大」というブランド感覚を中大関係者の間に広く根付かせることだ。そのためには結果を出さなければならぬ。サッカー部にとってインカレ（全日本大学サッカー選手権大会）優勝のタイトルは、絶対に獲らなければいけないものであったのだ。

「目に見える結果が一番説得力を持つのは当たり前です。目に見えない積み重ねで、目に見える結果を出してこそ、言行が一致した説得力を生み出すことが出来ると思います」

チームを変えるために、応援を見直した。山形さんがキャプテンになる前のサッカー部は、試合

の応援を軽視していた。応援は主に1年生の仕事で、上級生はただそれを見ているだけという状態が恒常化していた。試合会場が遠い場合は、応援に行かないこともあったそうだ。

「仲間が頑張っているときに応援に行かないなんて、チームとして問題ありですよ。チームを変えるのであれば、まずこういうところから見つめ直すべきだと思います」。その考えは次第にチームに浸透し、今では会場が遠い場合は、部員でお金を出し合ってバスを借りて応援に行っている。「ピッチに立っていると応援のありがたみはすごく感じます。勝ったときの喜びや負けたときの悔しさを全員で経験することが、チームの絆を深めることになります」。

一人一人の意識改革図る チームを「あるべき」姿に

部員一人一人の意識改革もすすめた。「昔はサ



テライトチームにいて試合に出られない状態でも、その状況を「しようがない」と受け入れてしまっている雰囲気がありました」という。だが山形さんは違った。「自分が求めている状況に自分が置かれたときは、自分自身が変わらなければいけないと思います。できることから変えていくしかない。やるべきことをやらずに願ってもかなうわけではない、ということですよ」と。

昨年、全日本大学選手権はじめ4冠達成 主務を体験して知った社会の「仕組み」

経済学部
加藤木 健さん

「自分が最高学年の時に全国制覇したい」。その強い決意を胸に、加藤木さんは、大学4年間を準硬式野球部に没入してきた。練習はもちろん、寮での生活とすべての時間が野球漬けだった。そ

そこで部員が「毎日の練習やチームの仕事の一つ一つに対して、自分のやっていることに意味がある」と気づける環境を作るようにした。選手のモチベーションが変われば、仕事への責任感も変わってくる。すると周りからの評価さえも変わる。「少しは健全なチームになれたかな」。山形さんは今後の課題も感じつつ、チーム改革の成果を自らに納得させるかのように口にした。(駒田)

の成果は見事に結実した。

中央大学準硬式野球部は、昨年の夏、第60回全日本大学準硬式野球選手権大会で優勝を勝ち取った。さらにこの年、関東地区大学準硬式野球選手権大会で優勝、秋季リーグ戦で優勝、関東地区大学・社会人準硬式野球王座決定戦で優勝と4冠を達成したのだ。

高校監督から言われ準硬式に 大学3年の主務体験が変わる

加藤木さんが準硬式野球を知ったのは、高校2年の冬。高校の先輩が大学で準硬式野球をやっていたのがきっかけだった。

硬式野球部に在籍し、甲子園を目指していた加



藤木さんは、当初、準硬式野球に興味を抱かなかったのだが、3年生で進路を決めるときに、高校の監督から「もっと広い世界を見て、いろいろな人と接して来てほしい」と言われ、考えをあらためた。そして、中大の準硬式野球部のセレクションを受け、準硬式野球の道に進んだのだった。

大学では、寮生活。練習は、テスト休みとシーズンオフ期間以外は、毎日のようにあり、ほとんど休みがない状態であった。3年からは主務になり、会計から試合の時の手配、リーグ戦の裏方、合宿や納会の準備など裏方の仕事に加わり、さらに忙しい日々を送った。しかし、この経験により「3年までには気付かなかったことを学ぶことが出来た」と話す。「1、2年の時は、ただバスに乗って試合に行っていたが、主務をやってから、こん



なに早い時間からいろんな人が準備しているのだと分かった。監督が、仕事をしながら色々なことをやってくれていることにも気がついた」と振り返る。

それでも主務の仕事はつらい。そんな時にも「ここでつらい思いをしておけば、社会に出たときに役立つ。同期よりは良い経験が来ている」と考えた。

主将として率先垂範心掛ける 4月からは仕事で人脈づくり

4年では主将になった。小中高校でキャプテンをしていた加藤木さんが、「大学に来てまでやるとは思っていなかった」という。主将になった当初は、「部をまとめられるか不安だった」と話す。

「みんな個性が強すぎる」というのが理由だ。全国から来ている部員は、その一人一人が高校でやってきたことにプライドを持っている。そこで「無理にまとめるのはやめた」という。部員の気持ちをうまく乗せていくように心がけた。言葉遣いも、「〜しろ」と命令口調ではなく、「〜しよう」と行動を促すようにした。

また、「4年生のスタイルがチームのスタイルになる」と率先垂範した。自分から厳しく練習をすることで、後輩に何かを感じとってもらえるよう行動した。「結果として、多くの後輩が自分た



ちから進んで練習に取り組んでくれた」という。準硬式野球部の方針は文武両道だ。加藤木さんも、準硬式野球と授業を両立させてきた。だが、卒業後は仕事に専念する考えだ。「草野球に誘われたらやるかも知れないけど」と野球とも距離を置くことにしている。

就職先は、某資材メーカーに決めた。「何でもできるような気がして、なかなか就職を絞れなかった。それでも、チーム企業と考えて、コツコツ練習して相手に勝ってきたように、企業対企業の取引をみんな一つになって進めることができる仕事がしたいと考えて決めた」という。

加藤木さんは、もともと社交性に富んでいる。「準硬の部員と仲が良いのは当たり前。だから経済学部の人を増やしたり、他の部の友人を増やしたりして、人脈をつくってきた」というように、友人関係は幅広い。社会に出てからも人脈づくりは、続く。

(上田)



学生記者取材班

【大学院】

橋本奈緒美

|| 理工学研究科博士1年

【2年】

池野絵美 || 文学部

野村茉莉亜 || 商学部

今子佳奈 || 文学部

梶原麗奈 || 法学部

西野美雪 || 法学部

【4年】

竹下奈穂 || 経済学部

【3年】

吉田百合香 || 法学部

武田朋実 || 法学部

上田雄太 || 文学部

新部真子 || 文学部

伊藤知広 || 経済学部

小室靖明 || 理工学部

駒田恵 || 法学部

【1年】

石川可南子 || 法学部

橋本あずさ || 法学部